
つむぎゆく想い

三月三日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つむぎゆく想い

【Nコード】

N7667Z

【作者名】

三月三日

【あらすじ】

クリスマス特別企画…というわけではありませんが、“けいおん！”の琴吹紬を扱った二次創作です。

12月24日、深夜。

この日、琴吹紬は、今年も、毎年そうであるように、赤い服に身を包んだ。

紬がそうするようになって、早6年の月日が流れた。

だけど紬は、その時のことを今も鮮明に憶えていた。

*

それは紬が、中学生になって最初の、クリスマスイブの夜だった。

一人の部屋で、窓辺に腰かけ、ただ窓越しの月を眺めていた。

それは、中学生になってからというもの、紬にとって、半ば習慣と化していた。

だが、いつもとは違うことが、この日、紬の身に起きた。

紬の目の前に、一人の老紳士が現れたのだ。

最初は泥棒かと思い、恐怖の中、警戒していた紬だったが、その老紳士の着ていた服を見て、不信任を露にした。

白い綿で縁取られた真っ赤な服と帽子。

手に携えられた大きな袋。

これが12月24日の夜でなかったら、紬もそんなことは考えなかつただろう。

ただの“怪しい人”として警察に通報していたに違いない。

だがこんな日に“いかにも”な格好の老紳士である。

だから紬は思わず呟いたのだ。

「サンタクローズ？」

果たして、その“いかにも”な格好の老紳士は、口元と顎に蓄えられた、やはり見事なまでの“いかにも”な髭を撫でながら、優しく頷いた。

「サンタさんが…何で？」

何故、自分の所へなんて来たのか…と。

紬はそう、小さく訊ねた。

何故、自分の所へ…。

それは、紬にしてみれば、サンタクローズにとっては、かなり不毛なことのように思えたからだ。

「だって、私には望むことなんてないのに…」

だから紬は、その言葉を続けたのだ。

「だからだよ」

だがサンタクロースは、優しい微笑みを崩すことなく、そう言うてのけた。

だから来たのだと…。

「琴吹紬くんだね？きみは何故、何も望まないんだい？」

「だって…」

紬は目を伏せる。

サンタクロースは、紬の部屋をぐるりと見渡し、軽く溜め息を吐いた。

そこには綺麗に積み上げられた箱が幾つもある

そしてその箱のどれもが、丁寧にラッピングされていた。

「また今年も、開けてないんだね…」

その箱は、紬がクリスマス・プレゼントにと、両親や、両親の知り合いから貰ったものだった。

そのどれもが、中学生が手に入れるには、高価な物であることくらい、紬にだって察しがつく。

だから開けたくなかった…それが紬の本音なのだ。

「どれだけ高価な物を貰ったとしても、私の心は満たされません…」
そう言うと、紬はベッドに腰を下ろす。

「寂しいのかい？」

「寂しい？」

紬は解っていたのだ。

何故、両親が、クリスマスだからといって、こんなにも高価な物を、
幼い娘に贈るのか。

紬の父親は、様々な会社を手広く経営している。

そのおかげで、紬の家は“財閥”として認知されていた。

だがそんな生活と引き替えに、両親は娘との時間を犠牲にせざるを得なかった。

普段、滅多に顔を合わすことのない娘への、贖罪と埋め合わせのために、この高価な贈り物が存在しているのだ。

無論、紬だって納得はできない。

それは当然だ。

紬は何も、今のような絢爛豪華な生活を送りたいわけではないのだ。

ただただ普通に良かった。

両親がいて、自分がいて、温かいご飯と楽しい会話がある。

そんな家庭で十分だったのだ。

だから紬は、自分をほったらかしにしていることも、それを補填するかのように、イベントの時の贈り物を高価な物にするのも、納得できなかったのだ。

だが紬は聡明な子だった。

納得はできない…しかし、理解はできた。

両親が、限りのある時間の中で、いかに具体的に、娘へ愛情を伝えるか。

その手段に贈り物はうってつけだったのだ。

だから、納得はできないが、理解はできてしまう。

そしてそれが尚一層、紬を悩ませていた。

「どんな贈り物をしたら、きみは開けてくれるのかな？きみが喜ぶ物を、ぼくはあげたいんだよ」

「どうして…？」

「それは、ぼくがサンタクロースだからさ！」

「ふふっ」

大袈裟に胸を張り、自信満々の笑顔でそう答えるサンタクローズに、
紬も思わず吹き出してしまった。

「やっと笑ってくれたね」

そしてその言葉に、紬の心も少しほころんだ。

紬はベッドから立ち上がり、再び窓際へと歩み寄る。

「申し訳なくって…」

窓から外に視線を向け、悲しい表情を浮かべる。

「申し訳ない…？誰にだい？」

「サンタさんだって知ってるでしょ？この世界には、クリスマスだからといって浮かれている人たちがいる。だけどその一方で苦しんでいる人だっているんです！戦争や災害、貧困、飢餓、差別、弾圧。この瞬間瞬間、生命の危機に晒されている人だって…。なのに私だけ、自分の望みを叶えるだなんて…」

紬の必死の訴えに、サンタクローズは黙って耳を傾けた。

「サンタさん、お願いします。もし私の望みを一つだけ叶えてくれるというのなら、世界中の苦しんでいる人々を救ってください！」

気づくと、紬はサンタクローズにすがりついていた。

つまりはそれほど、必死だったのだ。

「それは無理だね…」

だがサンタクロースは、にべもなく首を横に振った。

「どうしてですか…？サンタさんなら、どんな望みだって叶えることができるんじゃないんですか！？」

「それは違うよ。私は神様ではない。サンタクロースなのだから」

そしてサンタクロースは更に言葉を続ける。

「私の力は、子供たちが欲する物を贈ることだ。だがそれには限りがある。つまりは、その願いは自分自身のことではなくてはならないのさ」

「自分自身…？」

「そう、自分自身だ。つまり、きみがきみ自身について望むことなら叶えることもできるが、他人に対して望むことまで叶えることはできないんだよ」

「そんな…」

「それでも、きみが何かを望むなら、ぼくはきみの望みを叶えてあげよう」

サンタクロースの言葉に、最初は悲観的だった紬だが、しだいにそ

の表情からは固い決意みたいなのが感じ取れた。

そして…。

「それなら一つだけ、サンタさんをお願いしたいことがあります…」

*

「そうか、あれからもうそんなに経つのか…」

あの時のサンタクロースの前には、今年の春、大学生となった紬がいた。

「はい。だからもう、今年で辞めるつもりです」

「そうか…。残念だが仕方がない。きみにもきみの望むことが見つかったんだね？」

「はい！私は今までサンタさんの力を借りて、自分の望みを叶えてきました。でも私も来年は二十歳だし、これからは自分の力で、自分の夢を叶えていくつもりです」

そう言った紬の表情は、実に明るく、そして輝いていた。

「もう決めたんだね？」

「はい！仲間ができたんです」

「仲間？」

「はい！最高の仲間です。彼女たちが教えてくれたんです。勇気を持って、前へと一歩踏み出すことの大切さを。そして、自分の夢や希望を信じる尊さを…」

「うん…、解った。それなら今夜で私ともお別れだね。今までありがとう。きみに救われたのは、私も同じだったのかもしれないね」

「サンタさん…」

「さあ、それじゃあ最後の仕事と行こうか」

「はい！」

そして紬の脳裏には、あの日の言葉が蘇る。

何故ならそれこそが、これからの紬の、夢や希望の指針なのだから…。

『それなら一つだけ、サンタさんをお願いしたいことがあります…。私をサンタクローズにしてください！そして世界中の、苦しんでいる人たちを救う力を、私にください！今この瞬間も苦しんでいる人々を、笑顔にできる力を…私に、私にください！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7667z/>

つむぎゆく想い

2011年12月25日00時45分発行